

冠詞を教えるために

小 石 悟

初めに

日本語には冠詞がない。また名詞は形の上で単数・複数の概念の相違を表すことができない。複数を表す場合は「1 匹の虫」「2 軒の家」「車 3 台」のように他の名詞を併用して使うか、「子供達」のように漠然と複数を表す語を使う¹⁾。普段日本語を使って生活している場合はこれでなんの支障も起らない。「船が衝突した。」と言えは普通は「2 艘の船」と考える。しかし、いったんフランス語のように、名詞にいろいろな冠詞がつき、単数・複数を区別しなければならぬ言語を学ぶとなった途端に、今まで名詞を「一般的なことを表す」のか「特定のものを表す」のか、「単数」にするか「複数」にするかという、名詞を概念化する習慣がなかったことは非常な障害になる。初心者、まず何が問題なのか、何をどう区別しなければならないのかさえ分からない。極端な場合は、冠詞が必要であることさえ分からない。また、かなり上級に進んだ学生でも、さらに言えば筆者も含めて教師でさえも、冠詞を間違ふことは多々あり、冠詞は日本人に最後まで残る問題であると思われる。

この論文はこれまであまり問題にされなかった日本人学習者に対する「冠詞の教え方」を取り扱う。まず、フランス語学習全体における冠詞の教え方の問題点を考察し、次に教え方そのものの問題点を考察する。冠詞の使い方を問題にする場合、ある程度言語学的な説明は避けられないかもしれないが、初心者に対して、どういう段階で、どの程度、どのように説明するかを教師は常に念頭に置いておかなければならない。Krashen (*Principles and practice in Second Language Acquisition*, Pergamon Press Inc. 1982) は我々が一口に「文法」と言っているものには幾つかのレベルがあり、英語に関して、上位から次のように5段階に分類できるとしている。

1. Rules of English
2. Formal linguists' knowledge
3. Applied linguists' knowledge
4. Best teachers' knowledge
5. Rules taught

初心者が学ぶ文法規則 (Rules taught) は文法規則全体からみたらごく一部の非常に抽象化された規則でしかない。冠詞に関していえば、その規則では正しい文を作り出すためには極めて不十分である。その場合、教師の役割は、自分の持っている文法知識 (Best teachers' knowledge)、必要ならそれ以上のレベルの文法知識をいかに学習者に分かりやすく伝えるかであろう。本論では、初心者の冠詞に対する意識を高めるような、初心者にも分かりやすいメタ言語について、さらに、教師が知っておくべきメタ言語について考察する。

1. フランス語学習全体における冠詞の教え方の問題点

日本で出版されている教科書では、冠詞は最初の 1~3 課のどこかで提示される。定冠詞は、普通、「一般的なこと (la radio, les chats)」「限定されていること (la fille de Pierre)」「話題になっていること (Le garçon est étudiant.)」「一つしかないもの (le soleil, la lune)」を表すと説明されている。不定冠詞の場合は、「あるカテゴリーの中の不特定のもの (C'est un médecin.)」「一人、一個のような数 (un chat et deux chiens)」を表すと説明される。各々の説明に対応する例が示され、次に、5~10 ほどの練習問題があり、これで冠詞は学習したことになる。部分冠詞についても同様な説明が数課先に出てくるが、その後教科書の最後まで二度と冠詞に関する説明は出て来ない。いったん数行の説明があれば、後は学習者が自動的に学習するかのように進んでいく。フランスで出版されている教科書でも事情はほぼ同じである。

教科書で冠詞の説明にあまりスペースを割いていないのは、価格の問題があるからである。教科書も商品であるから高いと売れない。これは学習者が買わないのではなく、教師が採用しないからである。教師に採用される可能性がある価格 (2,300 円前後) を設定すると、ページ数は 60 ページほどになり、いわゆる「初級文法」を全て入れようとする、必然的に各々の文法項目の説明は最小限度のものにならざるを得ない。もし教科書の問題を早急に変えることが無理だとしたら、教師は自分でプリントを作成して何らかの対処をするしか

いであろう。

冠詞を教えようとする、次には時間の問題が出てくる。制度として「初級文法」を終わらせることを期待されている場合は特にそうである。しかし、「初級文法」でも、関係代名詞 (lequel, laquelle, ...)、条件法過去、前未来形など初心者がいつ使うのか分からないような文法項目もある。これらに比べると、冠詞はほとんど全ての発話に必要であり、頻度から見てはるかに重要である。冠詞の使い方にもっと時間をかけるべきではないだろうか。特別に「冠詞の学習」という時間をとらなくても、学生が間違い度に、なぜ間違いかを簡潔なメタ言語で説明することによってクラス全体に分からせ冠詞学習の時間を節約することも可能である。

「いったん数行の説明があれば、後は学習者が自動的に学習するかのように進んでいく。」と述べたが、本当に「自動的に」学習できるのであろうか？

子供の場合2才～6才の間に、音、特に名詞の音から始めて、メタ認識の発達と同時に言語を習得していく。この場合重要なのは、子供は何が重要なのか分からないので、習得できる時期の差はあれ、聞いたこと全てを習得しようとする。しかし、成長するにつれてこの能力は失われ、高校生や大学生になった段階では、コミュニケーションに必要なものを選択的に学習するようになっている。例えば、冠詞と単数・複数の区別を示す要素を除いた次の文を見せると、ほとんどの学生は「子供はマティスの絵が好きだ。」ということの意味する文だとは理解する。

(...) enfant (...) aime (...) (....) tableau (...) de Matisse.

日本では伝統的にフランス語を学ぶことはフランス語のテキストを読むことであったために、文のおおよその意味を取るためには、名詞（主語）—動詞—名詞（直接目的語）にだけに注意すればよかった。また、奇妙なことだが、新しい教授法とされている *approche communicative* も、コミュニケーションを重視しているので、「通じればいい」と解釈された結果、正しい文を作り出すという観点からいうと弊害がないわけではない。しかし、自分で文を作らせると、最初の *enfant* から *un enfant*, *des enfants*, *l'enfant*, *les enfants* のどれにするか迷うし、*tableau* についても同様である。そして文中に名詞が多くなればなるほど間違いの可能性は高くなる。間違いを少なくするためには、早い段階から冠詞へ注意を向けさせ、冠詞への感受性を発達させることが必要である。

以下に個々の事例について説明するが、これはあくまでも教室内の実践の一例であり、必ずそうしなければならないということではない。同じ事例でも別の説明も当然有り得る。重要なのは、いろいろなメタ言語の方法の中から自分

の生徒のレベルに最も合う説明の仕方を選ぶことであろう。

2. 直接目的語の場合の定冠詞と不定冠詞・部分冠詞の選択

多くの場合、「定冠詞＝一般的なもの」、「不定冠詞＝不特定のもの」、を表すと説明されているが、学生にすぐ理解されるかどうか分からない。例えば、

(1) Pierre veut se marier avec une Japonaise.

と言った場合、Pierre がまだ 10 才くらいで、漫画を読んで漠然と日本人女性に憧れを持っている場合は「不特定」だが、Pierre が学生で、既に意中の人がいる場合は「特定」になるからである。したがって、不定冠詞が表すものは、「全くの不特定」と、「特定だけど名前を言っていないだけ」と区別しなければならない。

直接目的語の説明が、「一般的なもの」「不特定のもの」という区別で上手くない場合は、質と量の側面から説明することも可能である。物には「質」の側面と「量」の側面がある。直接目的語の冠詞を選択する場合、まずその文が「質」を問題にしているのか、「量」を問題にしているかを理解させる。次に、「質」を問題にしている場合は「定冠詞」、「量」を問題になっている場合は、数えられるものの場合には「不定冠詞」、数えられないものの場合には「部分冠詞」になることを理解させる。簡単な単語を使って、次のような問題を作成することはそれほど難しくはないであろう。

- (2) 1. En général, les Français boivent vin aux repas.
2. J'aime beaucoup vin.
3. Elle a acheté sandales blanches pour l'été.
4. Il méprise compliments.

.....

このような問題を通して、boire, acheter, manger, avoir, préparer, fabriquer のような動詞は、目的語で表されたものの「量」が問題になるので「不定冠詞」あるいは「部分冠詞」を要求し、aimer, admirer, détester, respecter, mépriser のような「質」を問題にするような動詞は「定冠詞」を要求することを理解させることが重要である（しかし、J'aimerais du café. のように、同じ動詞でも部分冠詞を必要とする場合もあるので、あくまでも動詞ではなく、文全体が「質」を問題にしているのか、「量」を問題にしているかで冠詞を選択しなければならない。さらに「量・数」を明示する必要が生じる場所、例えばカフェやレストランでは J'aimerais un café. となるので、注意を要する）。

教科書の冠詞についての説明の中で、非常に重要なのにほとんど全く触れられていない用法は、「話題になっている場所に存在する、あるカテゴリーの全てのものを表す場合は、初出でも les になり、一つしか存在しないものは le になる。」ということである。これは「不定冠詞」の説明が「その名詞が初めて言及するもの」を表すと説明されていた場合、間違いのもとになり、次のような文で正しい冠詞をいれるのが困難になる。

(3) Mets (les) assiettes dans (le) lave-vaisselle.

assiettes はテーブルの上の全ての assiettes を指し、lave-vaisselle は一台しかないから定冠詞となる。同様に、次の2つの文で、

(4) L'année dernière, j'ai visité Strasbourg et j'ai beaucoup aimé la cathédrale.

(5) *L'année dernière, j'ai visité Strasbourg et j'ai beaucoup aimé l'église. cathédrale は司教座のある教区に一つしか無いので(4)は言えるが、教会は複数あるので(5)は非文となる。

(2)で示したような練習問題は初級用教科書に頻繁に見られるものだが、見過ごせない重大な欠陥がある。それは、単数・複数が既に示されていて、学生は定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の選択をするだけであるということである。既に述べたように、日本語には形態上、単数・複数の区別がないが、フランス語で名詞を表現しようとするときには、冠詞を選択する前に、あるいは同時に、単数にするか複数にするか考えなければならない。(2)のような練習問題ではそのような訓練過程が省略されている。学生の負担を軽減してあげようという意図からかもしれないが、長期的にみると名詞の単数・複数の概念化に鈍感になるという弊害が残る。それをできるだけ避けるために、初級の何らかの段階で、冠詞と同時に単数・複数を選ばせるために、名詞を全て単数にした次のような練習問題を導入するのも一案であろう。

- (6) 1. J'aime beaucoup (..... petit pois)
2. J'aime (..... riz)
3. Dans cette région, on trouve (..... charbon) et (..... fer)
4. Dans (..... école primaire), on fait faire (..... travail manuel) (à enfant)
.....

例えば、J'aime ... の目的語を選択する場合、ふつう「数えられるもの」は複数、「数えられないもの」は単数と教える。しかし、中級に進んだ学生でも、j'aime le cheval / le chien / la baleine. という学生も少なくない。文としては正

しいけれど、外国で言うと言と響きを買うことになる。あるいは、「数えられるもの」でも、J'aime le melon / l'ananas / le pastèque. と単数になる場合もある。訂正する場合、すぐに正解を与えず、J'aime le chien. と答えた学生には「美味しかった?」「どこで食べたの?」のような質問をすれば、多くの場合、学生は自分の間違いに気づく。J'aime le melon. の場合は les oranges, les pommes, les pêches と並べていけば、「切って分けるもの」すなわち大きさの問題というのは簡単に理解できる。冠詞のような面倒なものを学生が興味を持って学ぶようになるためには、教師がいかにゲーム感覚を持ち込むかも非常に重要となる。

3. Attribut の場合の定冠詞と不定冠詞、冠詞無し、の選択

Être の後に続く attribut の冠詞は冠詞無し、不定冠詞、定冠詞の3つの可能性がある。

(7). a. M. Faure est médecin.

b. M. Faure est un médecin compétent.

c. M. Faure est le médecin de l'équipe.

(7). a. のように冠詞無しの場合は「性質を付与する (attribution d'une qualité)」であり、基本的には M. Faure est gentil. と同じく形容詞と考える。職業、国籍の場合、名詞と考えて Il est Français. のように大文字で書く人もいるが、

(8) Il est très français.

(9) Elle est très musicienne.

と副詞 très で修飾することもできるわけだから、形容詞と考えるべきである。un médecin compétent のように不定冠詞を用いた場合は médecin compétent というカテゴリーに属する一員であることを表す (appartenance)。定冠詞の場合は、M. Faure という名前が指す人 (A) と、le médecin de l'équipe が指す人 (B) が同一人物である、すなわち A=B の関係になるときに定冠詞を使うと説明するのが初心者には一番簡単な説明だと思うが、厳密に言うところの説明は間違っている。例えば、

(10) Tokyo est la capitale du Japon.

(11) Kyoto a été la capitale du Japon pendant plus de mille ans..

という2つの文で、la capitale du Japon は、もし何かを指しているとしたら、同じ言葉にも関わらず別のものを指していることになる。la capitale du Japon は「日本の首都」という意味は持つが、何かを指しているのではないと考える

のが妥当であろう。

(12) Le cheval est la plus belle conquête de l'homme.

の場合も同じで、la plus belle conquête de l'homme は馬を指しているわけではなく、「人類の最も美しい征服物」という意味を持つだけである。(10) では Tokyo は la capitale du Japon という唯一物によって同定 (identification) されており、(12) では le cheval は la plus belle conquête de l'homme という最上級形、よって唯一物に同定されている。しかし、この説明は言語学的・哲学的説明としては妥当かもしれないが、初心者に attribut の前の定冠詞を説明するには $A=B$ のほうが分かりやすいのではないかと思う。そうすれば、 $B=A$ もありうるわけだから、identification の場合に限って主語と attribut を逆にした次のような文が可能なことも分かる。

(13) Le médecin de l'équipe, c'est M.Faure.

(14) La capitale du Japon, c'est Tokyo.

« Être + attribut » が否定文になったとき注意すべき点がいくつかある。

例えば、C'est un iPad ? の答えとして Ce n'est pas d'iPad. のような文がでてくる。これは、「否定文では不定冠詞・部分冠詞は de に変える。」という規則を忠実に適応した結果である。この規則を習得させようとするあまり、教師はしばしば「de に変わるのは他動詞の場合で、c'est.... の場合は変わらない。」ことを教え忘れるのでないだろうか？ Je n'ai pas d'iPad. の場合は iPad そのものがいないので de になり、Ce n'est pas un iPad. の場合は、ものは存在しており（したがって un）、ただ名称が違うだけと説明すれば多少は記憶には残るであろう。

もう一つの間違ひは、Elle n'a pas de mère compréhensive. のタイプである。これは他動詞 avoir の目的語に「否定文では不定冠詞・部分冠詞は de に変える。」という規則を忠実に適応した結果生じる間違ひなので、Ce n'est pas... より厄介である。Elle n'a pas de mère. と対比させながら、否定の範囲が mère ではなく compréhensive の方にかかっていること、すなわち、Elle a une mère mais celle-ci n'est pas compréhensive. であることを理解させると、Elle n'a pas une mère compréhensive. のように、なぜ de ではなく une になるのか分かってくる。次の文は、否定の範囲 (portée de la négation) が直接目的語ではなくその他の部分に及ぶために否定文であっても de ならない例である。

(15) Il n'a pas **une** épouse bien fidèle.

(16) On n'aime pas **une** femme si on n'est pas responsable !

(17) Je ne mange pas **de la** viande par plaisir.

- (18) Je n'ai pas **des** amis pour m'ennuyer.

4. 形容詞によって変わる冠詞

普通は無冠詞、定冠詞、部分冠詞と共に使われる名詞が、品質形容詞で修飾されたために不定冠詞 *un* に変わることは頻繁に起こる。

- (19). a. Il vit dans **la** solitude.
 b. Il vit dans **une** solitude agréable.
 (20). a. Elle m'a reçu avec amabilité.
 b. Elle m'a reçu avec **une** amabilité charmante.
 (21). a. Il a **de** l'ambition.
 b. Il a **une** ambition démesurée.

各々2つの文を対比させながら、品質形容詞が付くことで他の形容詞、例えば *ambition excessive / dévorante / politique...* 等の種々の *ambition* が想定され、その中から一つ選ぶので *une* になると説明すると、規則的なので他の文にも容易に適用できる。抽象名詞よりも「唯一のものは定冠詞」と教えられてきた *le soleil* や *la lune*、「数えられないものの具体的な量は部分冠詞」と教えられてきた *du vent* などのほうが理解しにくいようである。いろいろな種類の孤独を考えるよりも、「唯一のもの」である太陽が複数あることを想像するほうがより難しいのかもしれない。この場合も、*beau* という形容詞が付いたために、*soleil* を修飾できるその他の形容詞、たとえば *un soleil ardent / radieux / pâle / ...* といろいろな性質の太陽が想定され、その中から選択になると説明できるであろう。

- (22). a. **Le** soleil éclaire la campagne.
 b. **Un** beau soleil éclaire la campagne.
 (23). a. Il fait **du** vent.
 b. Il fait **un** vent violent.

travail の場合は、形容詞がつかないと不可算名詞なので、部分冠詞になる。

- (24) Il a encore **du** travail à faire.

品質形容詞で修飾されると *un travail intéressant / bien payé / ennuyeux* と不定冠詞になる。ここまでは *vent*、*argent* など他の名詞と同じだが、分野を表す形容詞や〈*de* + 名詞〉がつくと

- (25). a. des travaux publics / ménagers / agricoles
 b. des travaux de construction / de rénovation / de réparation

と複数になるので、機会が生じたときに注意を喚起する必要がある。

全ての形容詞が un を伴うわけではない。関係形容詞の場合は

- (26). a. l'air **marin** (= de la mer)
b. le brouillard **matinal** (= du matin)
c. l'année **scolaire** (= de l'école),
d. le secret **bancaire** (= de la banque)

のように、不定冠詞 un にはならない。ただし、année、secret のような可算名詞は、数の「1」を表す場合には une année scolaire、un secret bancaire となる。

5. 一般的なことを表す場合の le、les、un の使い分け

「ビーバーはダムを作る。」というような「一般的なこと」を言う機会は極めて多い。したがって、冠詞の使い分けは非常に重要になるし、さらにこれに単数・複数の問題が加わる。

- (27). a. Le castor construit des barrages.
b. Les castors construisent des barrages.
c. Un castor construit des barrages.

簡潔に言うと、le castor は「種・カテゴリー」を指し、数は問題にしない。Les castors は個々の個体のある程度のデータから帰納的に得られた一般的なことを表す。例外があっても構わない。Un castor が指すのはそのカテゴリーに含まれるどの個体でもよく、その代わり例外は許されない。(27). a.~c. の場合、「ダムを作る」ということは全てのビーバーに当てはまるので、結果的にはほぼ同じことを言っていることになる。しかし、次のような場合は le、les、un が同じように使えるわけではない。

- (28). a. Le kangourou vit en Australie.
b. Les kangourous vivent en Autralie
c. *Un kangourou vit en Australie.

- (29). a. *Le garçon ne pleure pas.
b. Les garçons ne pleurent pas.
c. Un garçon ne pleure pas.

Le の場合は「種」を問題にしているので、述語は「種」を定義するのに適切な内容でなければならない。vivre en Australie ということはカンガルーを種として説明するときには必ず出てくることなので (28). a. は正しいが、ne pas pleu-

rer は男の子の定義ではない。他の国に住んでいるカンガルーもいるが、ほとんどカンガルーはオーストラリアに住んでいるので (28).b. は正しく、また、自分の知っている男の子を見てみると、「男の子はあまり泣かない」と思えば、(29).b. が一般的なこととして提示される。一方、オーストラリア以外に住んでいるカンガルーもいるので、(28).c. は間違いとなる。un が一般的なことを表すためには、述語の内容が全ての個体に付与できるものでなければならない。すなわち、特定の場所・時間に限定されたものであってはならない。

(30). a. Un hérisson se promène le soir.

b. Un hérisson se promène le soir dans le jardin.

(30).b. は文としては正しいが、dans le jardin と限定されているので、一般的なことを表せない。

それでは (28).c. は言えないのに、なぜ (29).c. は言えるのであろうか？ (29).c. の意味は「(一般的に) 男の子は泣かない。」ではなくて、「男の子だったら泣くな。」である。un は述語で表された内容がカテゴリー内の全ての個体に合うものでなければならない。例外が許されないので、そうでない場合はそのカテゴリーから外されることになる。泣いている 5 才の男の子に、暗に「泣いたら男の子のカテゴリーから外すよ。」と言え、ほとんど脅しである。この例外を認めず、そうでない場合はカテゴリーから排除するという un の特性は、次の例のように「脅し」、「アドバイス」などを表すときに用いられる。

(31) Une femme obéit à son mari. (「妻なら夫に従え。(さもないと ...)」)

(32) Un chrétien est charitable. (「キリスト教徒なら慈悲深くありなさい。」)

実際にことを行った人が一人、あるいは数人であっても、それがそのカテゴリーを代表するに値する顕著なことであった場合も les になる。

(33) Les Américains sont allés dans la lune en 1969.

(34) Les Chinois ont découvert la porcelaine.

(35)、(36) のように、カテゴリーを表す le、帰納的一般化の les のどちらでもよい場合もあるが、「絶滅に瀕している。」のような「種」が問題に場合は、当然ながら、le しか使えない (37)。

(35). a. Une fois de plus, c'est **le** contribuable qui paie.

b. Une fois de plus, ce sont **les** contribuables qui paient.

(36). a. Dans l'Egypte ancienne, **le** chat est entouré d'un grand respect.

b. Dans l'Egypte ancienne, **les** chats sont entourés d'un grand respect.

(37). a. **Le** lynx est en voie de disparition.

b. ***Les** lynx sont en voie de disparition.

主語になるか、目的語になるかによっても異なり、「一般的なことを表わす un は直接目的語には使えない」という人もいる。確かに、次の文で、un が主語に含まれている場合は一般的なことを表し正しい文になるが、目的語に un を含む文は非文となる²⁾。

- (38). a. L'odeur des chats éloigne les souris.
b. L'odeur d'un chat éloigne les souris.
- (39). a. Les souris n'aiment pas l'odeur des chats.
b. *Les souris n'aiment pas l'odeur d'un chat.
- (40). a. Le rôle d'un médecin est de guérir les malades.
b. *Le rôle d'un médecin est de guérir un malade.

一般的なことを表す冠詞の使用法はいろいろな場合があり、ここに述べた事例はほんの数例にすぎない。まだ不明なことも多々有り、更なる研究が必要である。

6. 〈名詞₁ + de + 名詞₂〉の構文で、名詞₁ が *prédictat nominalisé* (動詞から派生した名詞) の場合と *sous-catégorisation* (下位区分) の場合

〈名詞₁ + de + 名詞₂〉の場合は2つの名詞間の関係が非常に多岐にわたるので、まず初めに名詞₁ が動詞から派生した名詞と、そうでない名詞とを区別したほうがよい。次に、動詞から派生した名詞の場合は、もとの動詞句に戻って考えてみる。次の名詞句を比較してみよう。

- (41) l'enseignement **du** français.
- (42) la participation **des** étudiants.
- (43) le cours **de** français.

L'enseignement du français. のもとは enseigner le français なので *le* が残る。(42) は Les étudiants participent à... から来ており、主語の *les* が残る。しかし同じ直接目的語でも、

(44) Il est allé chercher des champignons dans la forêt.
の下線部を名詞で言い換えると、

(45) Il est allé à la recherche de champignons dans la forêt.
となる。これは名詞化すると、「de **des** champignons」となり、*des* が抜け落ちるので、一見無冠詞のようになるからである³⁾。名詞₁ と名詞₂ の関係が「主語—動詞」であれ「動詞—直接目的語」であれ、もとの動詞句に戻って考える

癖をつけさせれば、間違いはかなり減少する。

一方、le cours de français のような場合は、cours の下位区分を表す。すなわち、cours には cours de français / d'anglais / d'histoire / de philosophie といういろいろあり、その一つを指す場合は無冠詞となる。名詞₂によって下位区分を表す名詞は、たとえば

- (46) le **système** d'alarme / de classification / de fermeture automatique
le(s) **moyen**(s) de communication / de transport / de contrôle
un **dispositif** d'arrêt automatique / de sécurité

など非常に多数にわたる。名詞₁が hyperonyme（上位概念語）、名詞₂が hyponyme（下位概念語）の場合も名詞₂の前は冠詞無しである。

- (47) un **sentiment** de doute / d'infériorité / de culpabilité
une **impression** de tristesse / de malaise / de déjà vu
une **sensation** de soif / de vertige / de légèreté
une **atmosphère** de haine / de fête / de suspicion

次のように、名詞句だけの問題を用いて、どれが動詞から来た名詞か、どれが下位区分を要求する名詞かを気づかせるのも一案である

- (48) le maintien de (.....) discipline
les stratégies de (.....) apprentissage
Les critères de (.....) évaluation
L'activité normale de (.....) cerveau
Le changement de (.....) date

.....

もとの動詞句に戻って冠詞を選択するというやり方に対する反例あるいはバリエーションもある。たとえば、créer、fabriquer は目的語が文脈に初めて出てきたときには「créer / fabriquer + un (des) 名詞」であるが、名詞化された création、fabrication について見てみると、定冠詞の使用も見られる。

- (49). a. De 1933 à 1940, la priorité a été donnée à **la création des camps de concentration** pour briser l'opposition communiste et non communiste.
b. La nécessité de susciter en Europe **la création de grandes unités de production** comparables à celles qui existent aux Etats-Unis, est souvent reconnue.

- (50). a. **La fabrication des armements** pour la marine de guerre a, bien entendu, suivi pas à pas cette formidable accélération de la ca-

dence des constructions navales.

- b. Mais ce ne fut que l'année 1944 qui vit **la fabrication d'armements** atteindre le rendement souhaité.

« fabriquer des bombes » を名詞化したときにどうなるかを、文・時制を変えて、19 人のフランス人に対してアンケートを行ったところ、次のような結果が得られた（回答者は全員日本在住のフランス人教師である）。

- (51) 1. La fabrication {des, de} bombes est plus facile qu'on ne pense.
des/de どちらも良い (7) des (4) de (8)
2. La fabrication {des, de} bombes au plastic est plus facile qu'on ne pense.
des/de どちらも良い (7) des (5) de (7)
3. La fabrication {des, de} bombes au plastic a été plus facile que je ne pensais
des/de どちらも良い (5) des (13) de (1)
4. En 1945, la fabrication {des de} bombes a été abandonnée dans ce pays.
des/de どちらも良い (4) des (8) de (7)
5. Ce pays s'est lancé dans la fabrication {des , de} bombes à partir de 1950.
des/de どちらも良い (3) des (1) de (15)
6. Ce pays s'est lancé dans la fabrication {des, de} bombes atomiques à partir de 1950.
des/de どちらも良い (9) des (4) de (6)

結果としてこのアンケートから何らかの結論を導き出すのは不可能であることが分かった。しかし、このような現象が起こる動詞を調べてみるとある特徴のあることが分かる。それは「verbe existentiel」と呼ばれている動詞で fabriquer, créer の他に、produire, construire, publier, rédiger, confectionner などがこのグループに入る。「verbe existentiel」の特徴は「ものを生み出す・作り出す」ということである。一方、transporter, détruire, observer は「verbe pré-existential」と呼ばれ、その他に atténuer, augmenter, diminuer, distribuer, protéger, réformer, enseigner, réparer などがある。「verbe pré-existential」の特徴は、「ものは既に存在している」ということである。「輸送 (transporter)」したり「破壊 (détruire)」するためには、対象物は既に存在し

ていなければならない。la distribution des aliments を例にとると、次のような過程を経て名詞化される。

- 〈distribuer aliment〉
- 〈distribuer **les** aliments〉
- 〈distribution **DE les** aliments〉
- la distribution **des** aliments

« verbe pré-existential » に属する動詞の場合は « verbe existentiel » と比べるとバリエーションは非常に少ない⁴⁾。

- (52) Par exemple, comment, par qui, à quelles conditions se fait **la distribution des terres** ?
- (53) L'Allemagne a le droit d'appliquer directement la force féconde de son esprit à **l'amélioration des réalités**.

7. 部分冠詞について

他の冠詞の場合と同じく、部分冠詞の場合も、普通、例文も含めて半ページ程度を使い説明し、その説明も「部分冠詞は液体・気体・抽象名詞のように、数えられない物の、ある具体的な量を示すときに使います。」と1行程度の極めて抽象的なものである。その後、10問ほどの練習問題をやって、学習者は理解したものとして、次の文法事項に移り、部分冠詞には二度と戻って来ることはない。初心者の部分冠詞というものがあるということを理解させるならこれでいいかもしれないが、これだけでは絶対に部分冠詞が使えるようにはならない。どこかの段階で、どういう動詞・前置詞が部分冠詞を要求し、また逆にどういう名詞が部分冠詞をとるかということを、動詞・前置詞と名詞の双方から説明しなければならない。動詞は全ての動詞を取り上げる必要はなく、日常的に用いる基本的な動詞、être、avoir、il y a、falloir、faire、prendre、chercher、mettre、éprouver、trouver など、教師がそのレベルの学生に必要と思う動詞を選択し、次に各々の動詞について、どのような名詞が部分冠詞と共に用いられるかを教えなければならない。参考までに、être と avoir の場合の例を次に示す。

(54)

être

1. C'est **de la folie**, ce que vous faites !
2. C'est **du bon travail**.

3. Enfin, tout cela est **de la connerie**
4. Tout ça est **de l'histoire ancienne**.
5. Je crains que ce ne soit **du temps perdu**.
6. N'oubliez pas que si un mari chipe quelque chose à sa femme, ce n'est pas **du vol**.

avoir

1. Il a **de l'avenir**.
2. Elle a **de la voix**.
3. Le principal, c'est qu'elle ait **du caractère**, des ressources et **du bon sens**.
4. Et plus j'y pensais, plus je trouvais que l'idée avait **du bon**.
5. J'ai **du mal** à me lever à six heures.
6. Il a **du plaisir à** chercher des timbres rares.
7. On a **de la visite** !

例えば、〈J'ai **du mal** à〉を覚えれば、〈J'ai **de la peine** à〉、〈J'ai **de la difficulté** à〉への移行は非常に容易である。人は類似性によって学ぶので、類似性を利用できるような例文を提供すべきであろう。

語学的に言えば、部分冠詞は存在しないと考えてもよい。部分冠詞があると考えると、例えば、次の文の違いが説明できない。

(55). a. Donne-moi tes spaghetti.

b. Donne-moi **de** tes spaghetti.

フランス人に「この de の品詞は何？」と質問すると、約半数は「部分冠詞」、残り半数は「前置詞」と答える。前者は、「全体の一部」という「意味」から「部分冠詞」と答えるのだが、フランス語の部分冠詞は du、de la であるから明らかに間違いである。後者は、答えは正しいのだが、それでは donner の直接目的語になぜ前置詞がつくのかは答えられない。解決策は de の前に、「構文的には存在するが表面には現れないゼロ要素（便宜上、以後 \varnothing と表記する。）」を想定することである。すなわち (56). b. は次のように考えられる。

(56) Donne-moi (\varnothing) de tes spaghetti.

不特定の量をあらわすのはこのゼロ要素である。一見突飛な考えに見えるかもしれないが、他の構文でも「構文的には存在するが表面には現れないゼロ要素」を想定した方がよい場合がある。一つは中性代名詞 en を用いる場合である。

(57) Tu as acheté des cartes postales ?

– Oui, j'en ai acheté \varnothing .

– Oui, j'en ai acheté cinq.

– Oui, j'en ai acheté plusieurs.

– Oui, J'en ai acheté une dizaine.

J'en ai acheté. と答えた場合は「不特定の量」を買ったことを意味するわけだが、acheté の後に φ を想定すれば $\langle \varphi - \text{cinq} - \text{plusieurs} - \text{une dizaine} \rangle$ というパラディグムができ、「不特定の量」を表すのは「構文的には存在するが表面には現れないゼロ要素 (φ)」ということになる。

最近ではフランス人の間でも、次のような過去分詞の一致の間違いが散見される。

(58) Tu as acheté des cartes postales ?

– Oui, j'en ai achetées.

これは「複合過去・大過去の場合、過去分詞は直接目的語人称代名詞の性・数と一致する。」という規則を、人称代名詞の部分忘れ、「複合過去・大過去の場合、過去分詞は直接目的語の性・数と一致する。」と覚えて適用した結果である。en は des cartes postales を表し、直接目的語だから一致させるべきだと考えるのであろう。しかし (58) の acheté の後のパラディグムを見れば分かるように、直接目的語は cinq, plusieurs, une dizaine である。とすると、j'en ai acheté. の場合も、j'en ai acheté φ . と考えて、直接目的語は φ であり、en ではない、したがって過去分詞は一致しない考えるべきである。

このゼロ要素の存在を認めたところで部分冠詞に戻ると、部分冠詞は次のように考えられる。

(59) J'ai bu (φ) de la bière.

すなわち、一般的なものを表す不可算名詞 $\langle \text{la bière (定冠詞} + \text{名詞)} \rangle$ の不特定の量 $\langle \varphi \text{ de (ゼロ要素} + \text{前置詞)} \rangle$ となり、部分冠詞は消滅する。同様のことが不定冠詞複数 des にも考えられる。

(60) J'ai acheté des disques.

の des disques は、一般的なものを表す可算名詞 $\langle \text{les disques (定冠詞} + \text{名詞)} \rangle$ の不特定の量 $\langle \varphi \text{ de (ゼロ要素} + \text{前置詞)} \rangle$ となり、 $\langle \varphi \text{ de les disques} \rangle$ が、contraction の結果、 $\langle \text{des disques} \rangle$ となる。現在は un の複数には des となっているが、un の複数には uns があり⁵⁾、des は音から言っても語源的には un の複数ではない。上記のように、「一般的なもので表されたものの不特定量」を表すために、意味的に un の複数となっただけである。

以上の論は次のようにまとめることができるであろう。

- (61) du ← \varnothing de le N
 de la ← \varnothing de la N
 des ← \varnothing de les N
 de mon ← \varnothing de mon N
 de ce ← \varnothing de ce N

これによって Où est-ce qu'on peut acheter de ces baskets ? の de ces も説明できる。この考え方の利点は、部分冠詞・不定冠詞複数・de mon・de ce が簡潔なパラディグムを成し、全て同じように説明できることである。文法はシンプルであることに越したことはない。

しかし、教師はこれを念頭に入れた上で、初心者にはやはり「部分冠詞」あるいは「un の複数 は des」と教えた方が簡単であろう。Donne-moi de tes spaghetti. とか、Il a bu de ton thé et mangé de tes crevettes. というような文が出て来て、「この de は何ですか？」という質問が出たときに答えればよいと思われる。

8. 〈Avoir + 身体の名詞〉の場合の冠詞

〈Avoir + 身体の名詞〉の場合の冠詞は修飾する形容詞の種類・位置によって変わるが、大まかに4つぐらいに大別できる。

名詞の前に épithète（付加形容詞）が置かれた場合は不定冠詞となる。

- (62) Il a **de** petits yeux.
 (63) Il a **un** petit nez.
 (64) Il a **de** grandes oreilles.

一時的なことを表す場合は定冠詞で、形容詞は名詞の後に置く。この形容詞は目的語の属詞である。

- (65) Marie a **les** yeux rouges parce qu'elle a beaucoup pleuré.
 (66) Le lapin a **des** yeux rouges.

Marie の方は泣いたから今一時的に目が赤いが、うさぎの方は恒常的に赤い。des yeux rouges の rouges は目的語の属詞ではなく、付加形容詞である。次も一時的な状態を表す例文である。

- (67) Il a **les** yeux humides, le regard flou.
 (68) Tu as **les** mains sales, va te les laver avant le dîner.
 (69) Il avait **les** pieds qui ne touchaient pas le sol.

形容詞ではなく (69) のように関係代名詞の場合もある。この文で des pieds

qui... とすると恒久的な性質とあり、宇宙人かなにかになってしまう。

人のタイプ・特徴を言う場合は、恒久的であるが、定冠詞も不定冠詞もある。

(70) Comment avoir **des** cheveux crépus ?

– Ah bon ? Maintenant c'est la mode d'avoir **les** cheveux crépus ?

(71). a. Elle a **des** yeux bruns.

b. Elle a **les** yeux bruns.

(72) J'aimerais préciser que les métis peuvent être blonds et avoir **les** yeux bleus, ou avoir **le** teint foncé et **les** cheveux noirs.

(72) で明らかのように、avoir les cheveux noirs は être blonds (すなわち avoir les cheveux blonds) と同じく、一つのタイプ・特徴を表す。avoir les yeux bleus も同様である。

タイプ・特徴ではなく、その人物の描写の場合は不定冠詞になる。

(73) Il avait **des** yeux très bleus au fond desquels brillait une lueur espiègle.

(74) Grand et maigre, il avait le menton en galoche, **des** yeux gris et doux derrière des lunettes à monture d'écaille, et **des** cheveux couleur paille qui tombaient en mèches molles sur son front haut.

小説では、単にタイプを述べることは稀で、人物を描写することが多いので必然的に不定冠詞の使用が多くなる。

9. 〈名詞₁ + de + 名詞₂〉の構文で、名詞₁ が Visée や modalité を含む場合

「将来到達すべき目標を設定し、それに到達するまでの行程を想定すること」を visée という。例えば projet de loi の場合、loi が成立するかどうかは将来のある時点にならないと分からず、それに到達するまでの行程を考慮しなければならない。名詞₁ が visée を含む名詞の場合、名詞₂ は無冠詞となる。次に visée を含む名詞とその実例のいくつかを示す。

- (75) **projet** de voyage / de pont / de roman / de financement / de thèse
plan de vol / de travail / de désendettement / d'urbanisme
programme de recherche / de formation / d'action régionale
procédure de divorce / de licenciement / d'inscription
entreprise de séduction / d'anéantissement (de la culture tibétaine)
politique de détente / de coexistence pacifique / de privatisation⁶⁾

第二のグループはやはり *visée* 含むが、達成までの過程ではなく、目標が実現しないかもしれないこと、すなわち可能性を評価するような名詞を含む場合で、名詞₂ はやはり無冠詞になる。(76) はそのいくつかの例である。

- (76) **menace** de guerre / d'épidémie / de grève
risque d'inflation / de maladie / d'incendie⁷⁾
danger de mort / de hausse des prix / de contamination
chances de réussite / de succès / de réélection
possibilité d'accès / d'annulation / d'application
probabilité de réussite / d'échec / de survie

単にテキストを読んだり、与えられた問題をやるのではなく、自分で産出するとなると、単数にするか複数にするかも問題になる。次の例のように、複数にすべき場合がある。

- (77) calculer ses **chances** de réussite
proférer **des menaces** de mort
une complexe industriel **aux possibilités** illimités de développement

une possibilité d'attaque とほぼ同じ意味を持つ la possibilité d'une attaque もある。いろいろな例外はあるにしても、一般的に言って、名詞₂ に何らかの限定詞がついたら、〈le + 名詞₁ + de + 限定詞 + 名詞₂〉となり、一方、何もつかない場合は〈un + 名詞₁ + de + 名詞₂〉となるということを教えておけば、かなりの間違いを防ぐことができる。これは *visée* を含む名詞だけでなく、他のいろいろな場合に適用することができる。例えば、次のような場合である。

- (78). a. Il faut demander un avis de spécialiste.

- b. Il faut demander l'avis d'un spécialiste.

この2文はほぼ同じ意味を持つが、唯一の違いは、a. の *spécialiste* は「専門家」という意味を持つが現実の世界のいかなる個体も指さず、いわばまだ意味だけのバーチャルな世界にある。その意味では形容詞と同じである。このバーチャルな世界にある *spécialiste* を「現実の世界に位置づける」のが限定詞の役割である。この働きを「現動化 (actualisation)」と言う。〈名詞₁ + de + 名詞₂〉の構文で、名詞₁ が動詞から派生した名詞のときに名詞₂ に必ず冠詞が付くのは、名詞₁ のもとになった動詞と名詞₂ の関係が〈主語 + 動詞〉または〈動詞 + 直接目的語〉なので、名詞₂ は必ず現動化、すなわち、現実の世界に位置づけられていなければならないからである。

possibilité の場合に戻ると、名詞₂ に形容詞がつくと、〈un + 名詞 + 形容詞〉

となるので、〈le + 名詞₁ + de + 限定詞 + 名詞₂〉が当てはまり、la possibilité d'une faible inflation. のようになる。別の説明の方法として、次のような生成過程を考えることも可能である。

- (79) une faible inflation
 →une faible inflation est possible.
 →une faible inflation est une possibilité.
 →la possibilité d'une faible inflation.

名詞₁ が対人関係 (demande、proposition、tentative、essai、obligation) や自己との関係 (volonté、désir、effort、souci) などの modalité を表わす場合も、名詞₂ は無冠詞になる。

- (80) **demande** d'emploi / de crédits / d'information
proposition de paix / de loi / de réforme
tentative d'évasion / d'explication / de suicide
essai de conciliation / d'explication / d'analyse
obligation d'achat / de discrétion / de service public
volonté de puissance / d'indépendance / de domination
désir de liberté / de vengeance / d'évasion⁸⁾
effort d'imagination / de modernisation / de développement
souci de perfection / de transparence / de simplicité

10. 〈名詞₁ + à + 名詞₂〉と 〈名詞₁ + à + le + 名詞₂〉

une brosse à dents のように、名詞₂ の前に冠詞がない場合は、名詞₂ によって名詞₁ をサブ・カテゴライズ (下位区分化) する。brosse の場合は、brosse à dents、brosse à cheveux、brosse à chaussures、brosse à habits、brosse à ongles と 〈à + 名詞₂〉で下位区分される。名詞₁ と名詞₂ の関係は brosse の場合は「用途」で統一されるが、これは稀な場合で、実際はもっと複雑である。名詞₁ と名詞₂ の関係を、その都度、次のように文として説明することもできる。

- (81) un pull à col roulé : un pull qui **a** un col roulé
 une tasse à thé : une tasse **pour servir** le thé
 un homme à femmes: un homme qui **aime séduire** les femmes
 un bateau à voiles : un bateau qui **marche avec** des voiles
 un papier à fleurs : un papier **sur lequel sont dessinées** des fleurs

しかし、このような説明を毎回やるのは時間的に不経済であるのは明らかで

あろう。un fil à papa や、指すものが物から人へ変わる moulin à paroles など
は面倒な説明をするよりも、一つの単語として「金持ちのドラ息子」、「お喋り
な人」と教えた方が簡単である。単語なのである程度覚えてもらわなければな
らないので、リストアップして学習者に渡すこともできるであろう。ちなみに、
筆者が「ロワイヤル仏和中辞典」に掲載されている用例をリストアップしたと
ころ、〈名詞₁+à+名詞₂〉全体で126、名詞₁として用いられている名詞は66
語であったので、リストアップする作業はそれほど難しくないと思われる。

〈名詞₁+à+名詞₂〉で重要なことは、その表現がフランス語を母語とする人
の間で既に決まった表現として定着していることで、話者が勝手に作りだすこ
とはできないということである。例えば、(82). a.、(83). a. は言えるが、(82).
b.、(83). b. は言えない。

(82). a. une femme **à forte personnalité**

b. *une femme **à personnalité très marqué**

(83). a. un couple **à grande différence d'âge**

b. *une femme **à caractère énigmatique**

〈名詞₁+à+le+名詞₂〉は「名詞₂によって名詞₁を修飾する」。例えば、「い
つも白い犬を散歩させている女性がいる。」という状況を想像してみよう。こ
れを文で表せば、Une dame a (promène) un chien blanc. となる。犬を話題に
して言うとは、le chien blanc de la dame となる。一方、女性を話題にするときに、
名前を知らないで、「ほら、あの白い犬をつれている女の人」と言おうとす
ると、la dame au chien blanc となる。この構文による描写は決まった表現と
して定着している必要がなく、極めて自由である。次に幾つかの例を示す。

(84) l'homme **à l'imperméable** / **au** regard clair / **à** la voix rauque

une jeune fille **aux** cheveux de lin

un vieux monsieur **à** l'allure sportive et élégante

un ouvrage **à** la trompeuse transparence

son visage **aux** lèvres exsangues

cette femme **aux** continuelles crèmes nocturnes

J'ai sur ces bancs **aux** merdes pigeonnières révisé d'ultimes concours.

〈名詞₁+à+le+名詞₂〉が描写を表し、いかに自由な表現力を持つか明らか
であろう。

11. 〈de + 国・地方〉の場合の冠詞の脱落

国・地方名が女性名詞の場合、冠詞 la をつけない場合がある。la France がその一つであるが、フランス語学習者の場合、使う頻度が高いので、どの場合に冠詞を省略するかは、初級のどこかで教えておくべきである

a. 最上級形の補語

la plus belle région de France

b. 出発点

Il vient de France.

Je vous verrai à mon retour d'Italie.

c. 所属・区別

l'ambassade de France

les diplomates de France

les vins de Bourgogne

la carte de France

les régions de France.

les pays d'Asie du Sud-Est

d. 称号・職名・団体名

le roi de France

la reine d'Angleterre

Electricité de France

一方、次のような場合は〈de + la + 国・地方〉となる。

e. 名詞₁ のもとの動詞の主語または直接目的語になっている場合

la production de blé de la France

la libération de la France

f. 名詞₁ に対して所有者の関係にあたる場合

l'économie de la Chine

la population de la Corse

les terriroires de la France

les régions de France は「所属」なので無冠詞だが、les territoires は「所有」の概念が入ってくるので、de la France となる。

g. 名詞₁ が唯一物のとき

la capitale de la France

l'altitude moyenne de la France

h. 国名・地方名に形容詞が付くとき

la carte de la France physique

終わりに

今まで論じてきたことは、冠詞についてのごく一部の、ある一つの説明の仕方に過ぎない。同じ現象について、まったく別の説明も可能である。重要なことは、初期段階で学んだ1～2行の説明だけで学習者がそれぞれの冠詞の使い方を「自動的に」身に付けることはほぼ絶対にありえないということである。幼児期に持っていた「選択できないので全てのものを受け入れる」という能力を失い、「情報に必要と思われるものだけを選択する」ようになっている高校生・大学生の能力を補うためには、いろいろな段階で冠詞の重要性に気づかせ、冠詞に対する感受性を育てることが必要ある。教師の役割の一つは、Krashenの分類による Formal linguists' knowledge あるいは Applied linguists' knowledge を学習者の理解できるようなメタ言語に直して、Rules of English (この場合は Rules of French であるが) との橋渡しをすることである。さらに、言語学者が全て知っているわけではないので、教師自身が Rules of French を見つける必要がある場合も出てくる。教師の最後の逃げ道であり、学習者の学習意欲を確実に萎えさせる「C'est comme ça.」をできるだけ少なくするために、教師自身が学習者に理解させるためのメタ言語を習得することが必要であると思われる。

注

- 1) 「友達」のように、単数か複数か分からない場合もある。
- 2) 目的語に含まれた un が一般的なことをあらわす次のような例もある。
 - (1) On reconnaît un lyxe à sa queue.
 - (2) On distingue une baleine d'un cachalot à la dentition.
- 3) 文を産出するときに、理屈から言って前置詞 de の後に des、du、de la が来るとしても、フランス語の規則から des、du、de la は無くなり、de φ となる（図式化すると〈前置詞 de + des、du、de la → de φ〉）という規則は非常に重要な規則だと思われるが、初級用の教科書ではほとんど触れられていない（それに、どの課で触れたらいいのだろう?）。おそらく、日本の教科書の文法は伝統的にテキストを読むための文法であり、文を作り出すという観点からは考えられていないからであろう。読んで理解するという立場からすれば、

- (1) Il cherche de secrétaires compétentes.

であっても

- (2)*Il cherche des secrétaires compétentes.

であっても、「彼」「探している」「有能な秘書」という意味さえ分かれば、「彼は有能な秘書を探している。」という文の意味は分かる。しかし、逆に、日本語から同じ意味を持つフランス語を産出しようとした場合、(1)の正しい文が出てくるかどうかは、はなはだ疑問である。

次の (3)、(4) を教えるときに、

- (3) Le sommet du mont Fuji est couvert de neige.

〈couvert de **de la** neige → couvert de neige〉

- (4) Le chemin est couvert de feuilles mortes.

〈couvert de **des** feuilles mortes → couvert de feuilles mortes〉

と教えることも可能だし、単に 〈être couvert de〉 の後は無冠詞となると教えることも可能である。〈être couvert de〉 に関してだけ言えば結果は同じで、後者の説明が簡単であろう。しかしこの説明は他に同じような現象が起こったときに適用できない。例えば、

- (5) L'église est entourée de vieilles maisons.

という文を作りたいとき、後者の説明をしていた場合は 〈être entouré de〉 もまた無冠詞となる、と語彙毎に学び直さなければならない。それよりも、前者の説明を思い出させて、

〈entourée de **de** vieilles maisons → entourée de vieilles maisons〉

となると教えた方が、他にも適用できる汎用性のある文法を学ぶことになる。この知識があれば、例えば次のような文の前置詞の後の冠詞の選択も直ぐに理解できるようになる。

- (6). a. Remplis la baignoire avec **de l'eau chaude**.

b. Remplis la baignoire **d'eau chaude**.

- (7). a. Il faut nourrir les pandas avec **des pousses de bambous**.

b. Il faut nourrir les pandas **de pousses de bambous**.

- (6). a.、(7). a. の冠詞が分かったら、次に、(6). b.、(7). b. は、それぞれ

〈de **de** l'eau chaude → d'eau chaude〉

〈de **des** pousses de bambous → de pousses de bambous〉

となることを理解するのは難しくない。

- 4) 同一の語であっても、いつかの意味がある場合、その意味によって冠詞の使い方が変わる場合もある。performance を例にとると、〈la (une) baisse de la performance〉と〈la (une) baisse de performance〉の両方がみられる。

- (1) [...] de façon négative la ratio force / poids de l'athète peut conduire à une stagnation ou à **une baisse de la performance**.

- (2) **une baisse de performance** de l'évaporateur.

辞書 (Antidote) を見てみると、performance には意味が2つあることが分かる。

- i. Résultat obtenu dans une épreuve, dans une compétition, dans un match ;

冠詞を教えるために

chiffre qui traduit ce résultat.

ii. Résultat optimal que peut donner une machine

performance と baisse との関係は、どの場合でも<主語+動詞>の関係であるが、i. の意味で用いられ場合は (1) のように定冠詞をとり、ii. の場合は無冠詞となる。さらに、ii. の場合は、Antidote では une machine としているが、(4).c. のように人の場合もある。このようにいろいろな場合があるので、常に細心の注意を払う必要がある。

- (3). a. La littérature scientifique s'accorde sur le fait qu'une déshydratation égale à 2% du poids du corps entraîne **une baisse de la performance** psychique.
 - b. Face à **la baisse de la performance** économique régionale globale, les effets d'emploi initialement considérables diminuent au fil des ans.
 - (4). a. **la baisse de performance** des pneus sur une chaussée mouillée
 - b. **la baisse de performance** des piles électriques
 - c. Le but de cette étude est de mieux comprendre les causes du décrochage ou de **la baisse de performance** des étudiants malgré leurs résultats au secondaire.
- 5) 現在では les uns (...) les autres でしか用いられない。
- (1) Ils se détestent les **uns** les autres.
 - (2) Des gens sont arrivés les **uns** après les autres.
- 6) politique の場合、politique d'austérité (緊縮財政、耐乏政策) のように、政策の「内容」に関する場合は無冠詞だが、politique de l'emploi、politique de l'immigration、politique des prix のように「分野」を表す場合は定冠詞をとる。
- 7) 同じ名詞でも意味が異なると冠詞も違ってくる。次の2つのグループを比べてみよう。
- (1) un risque d'agression, un risque d'accident, un risque d'épidémie
 - (2) les risques d'une aventure, les risques du métier
- (1) のグループは「これから起こるかもしれないこと」を述べているので、visée を含み、したがって無冠詞になる。一方、(2) のグループは aventure や métier に「含まれている危険」のことを言っていて、visée は含まれていない。まったく同様なことが cause の場合にも見られる。
- (3). a. La manque d'eau constitue **une cause de famine**.
 - b. Les marchands de combustibles estiment que le fait de modifier sans cesse la température est **une cause majeure de gaspillage**.
 - (4). a. Les causes **de cette maladie** sont encore très mal connues.
 - b. Tu sais **la cause de son divorce** ?
- (3). a., b. は「これから起こるかもしれないことの理由」であり、(4). a., d. は「既に起こったこと」の理由である。
- 8) Le désir de la gloire croît avec la liberté des sujets et diminue avec elle. (Montesquieu, *Lettres persanes*) のように名詞₂の前に la が来る例もあるので、より詳細な研究が必要である。

Bibliographie

- ANSCOMBRE J.-C. (1986a), « Article zéro, termes de masse et représentation d'événements en français contemporain », *Recherches linguistiques*, XI, « *Déterminants : syntaxe et sémantique* », Paris, Klincksieck
- ANSCOMBRE J.-C. (1986b), « L'article zéro en français : un imparfait du subjonctif ? », *Langue française*, No. 72, Paris, Larousse.
- BAYLON CH. & FABRE P. (1995), *Grammaire systématique de la langue française*, 3^e édition, Paris, Nathan.
- BENETTI L. (2008), *L'article zéro en français contemporain ; aspects syntaxiques et sémantiques*, Bern-Berlin-Bruxelles-Frankfurt am Main-New York-Oxford-Wien, Peter Lang.
- BESSE H. & PORQUIER R. (1984), *Grammaires et didactique des langues*, Paris, Hatier-Crédif.
- BORILLO A. (1987), « Notions de massif et comptable dans la mesure temporelle », in DAVID J. & KLEIBER G. (éd.), *Termes massifs et termes comptables*, Paris, Klincksieck.
- CORBLIN F. (1987), *Indéfini, défini et démonstratif : constructions linguistiques de la référence*, Genève-Paris, Librairie Droz.
- CORBLIN F. (1997), « Les indéfinis : variables et quantificateurs », *Langue française*, No. 116, Paris, Larousse.
- CORBLIN F., FERRANDO S. & KUPFERMAN L. (2006), *Indéfini et prédication*, Paris, PUPS.
- CURAT H. (1999), *Les déterminants dans la référence nominale et les conditions de leur absence*, Genève, Droz.
- DANON-BOILEAU L. (1997), « Dénombrement, pluriel, singulier », in FLAUX N., VAN DE VELDE D. & DE MULDER W. (éd.), *Entre général et particulier : les déterminants*, Artois, Artois Presses Université.
- DELATOUR Y., JENNEPIN D., LEON-DUFOUR M. & TEYSSIER B. (2004), *Nouvelle grammaire du français, Cours de Civilisation Française de la Sorbonne*, Paris, Hachette.
- DE VOGUE S. (2006), « L'article un, la position sujet et la relation avec le prédicat », in CORBLIN F., FERRANDO S. & KUPFERMAN L., *Indéfini et prédication*, Paris, PUPS.
- DOBROVIE-SORIN C. & BEYSSADE C. (2004), *Définir les indéfinis*, Paris, CNRS Éditions.
- FLAUX N. (1997), « Les déterminants et le nombre », in FLAUX N., VAN DE VELDE D. & DE MULDER W. (éd.), *Entre général et particulier : les déterminants*, Artois, Artois Presses Université.
- FLAUX N. & VAN DE VELDE D. (2000), *Les noms en français : esquisse de classement*, Paris, Ophrys.
- FURUKAWA N. (1977), *Le nombre grammatical en français contemporain*, Tokyo, France Tosho.

- GALMICHE M. (1986a), « Note sur les noms de masse et le partitif », *Langue française*, No. 72, Paris, Larousse.
- GALMICHE M. (1986b), « Référence indéfinie, événements, propriétés et pertinence », *Recherches linguistiques*, XI, « Déterminants : syntaxe et sémantique », Paris, Klincksieck.
- GALMICHE M. (1987), « Massif / comptable : de l'un à l'autre et inversement », in DAVID.J. & KLEIBER G. (éd.), *Termes massifs et termes comptables*, Paris, Klincksieck.
- GARDES TAMINE J. (2004), *Pour une grammaire de l'écrit*, Paris, Belin.
- GERMAIN C. & SÉGUIN H. (1998), *Le point sur la grammaire*, Paris, CLE International.
- GREVISSE M. & GOOSE A. (2011), *Le bon usage*, (15^e édition), Paris, De Boeck, Duculot.
- GOMBERT J.-É. (1996), « Activités métalinguistiques et acquisition d'une langue », *Acquisition et interaction en langue étrangère* No. 8., mis en ligne le 5 décembre 2011, Association Encrege.
- GUILLAUME G. (1975), *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*, Paris, Nizet.
- HUOT H. (1981), *Enseignement du français et linguistique*, Paris, Armand Colin.
- HUOT H. & SCHMIDT R. (1996), « Conscience et activité métalinguistique. Quelques points de rencontre », *Acquisition et interaction en langue étrangère* No. 8, mis en ligne le 5 décembre 2011, Association Encrege.
- KLEIBER G. (1981), *Problèmes de référence. Descriptions définies et noms propres*, Paris, Klincksieck.
- KLEIBER G. (1983), « Articles défini, théorie de la localisation et présupposition existentielle », *Langue française* No. 57, Paris, Larousse.
- KLEIBER G. (1987), « L'opposition massif / comptable et les adjectifs », in DAVID.J. & KLEIBER G. (éd.), *Termes massifs et termes comptables*, Paris, Klincksieck.
- KLEIBER G. (1989), *L'article LE générique. Généricité sur le mode massif*.
- KLEIBER G. (1997), « Massif / comptable et partie-tout », *Verbum* XIX, 3.
- KLEIBER G. (2001), « Indéfinis : lecture existentielle et lecture partitive », in KLEIBER G., LACA B. & TASMOWSKI I (éd), *Typologie des groupes nominaux*, Rennes, Presses Universitaires de Rennes.
- KLEIBER G. (2006), « Du massif au comptable : le cas des N massifs concrets modifiés », in CORBLIN F., FERRANDO S. & KUPFERMAN L., *Indéfini et prédication*, Paris, PUPS.
- KLEIBER G. (2013), « L'opposition nom comptable / nom massif et la notion d'occurrence », *Cahiers de lexicologie* No.103, Paris, Classiques Garnier.
- KLEIBER G. (2014a), « Massif / comptable : d'une problématique à l'autre », *Langue française* No.183, Paris, Armand Colin.
- KLEIBER G. (2014b), « Massif / comptable et noms de propriété », *Langue française* No. 183, Paris, Armand Colin.
- KLEIBER G & LAZZARO H. (1987), « Qu'est-ce qu'un syntagme nominal générique ? ou Les

- carottes qui poussent ici sont plus grosses que les autres », in KLEIBER G (éd.), *Rencontre(s) avec la généricité*, Paris, Klincksieck.
- KRASHEN S. (2009), *Principales and Practice in Second Language Acquisition*, First Internet Edition.
- Lammert M. (2014), « Référence collective massive vs référence plurielle indéfinie », *Langue française* No. 183, Paris, Armand Colin.
- LARARRA M. (1987) « La pêche au goujon : massif ou comptable ? », in DAVID.J. & KLEIBER G. (éd.), *Termes massifs et termes comptables*, Paris, Klincksieck.
- LE GOFFIC P. (1993), *Grammaire de la phrase française*, Paris, Hachette.
- LEEMAN D. (2004), *Les déterminants du nom en français : syntaxe et sémantique*, Paris, PUF.
- Maingueneau D. (1999), *Précis de grammaire pour les concours*, 3^e édition, Paris, Dunod.
- MARTIN R. (1983), « De la double extensité du partitif », *Langue française* No. 57, Paris, Larousse.
- MARTIN R. (1986), « Les usages génériques de l'article et la pluralité », *Recherches linguistiques*, XI, « *Déterminants : syntaxe et sémantique* », Paris, Klincksieck.
- MARTIN R. (2006), « Définir l'indéfini », in CORBLIN F., FERRANDO S. & KUPFERMAN L. (éd.), *Indéfini et prédication*, Paris, PUPS.
- MILNER J.-C. (1978), *De la syntaxe à l'interprétation*, Paris, Seuil.
- Muller C. (1987), « A propos de l'indéfini générique », In KLEIBER G (éd.), *Rencontre(s) avec la généricité*, Paris, Klincksieck.
- NEF F. (1987), « Terms de masse, pluriel et événements », in DAVID. J. & KLEIBER G. (éd.), *Termes massifs et termes comptables*, Paris, Klincksieck.
- NOAILLY M. (1987), « L'article zéro côté massif, côté comptable », in DAVID. J. & KLEIBER G. (éd.), *Termes massifs et termes comptables*, Paris, Klincksieck.
- PICABIA L. (1986a), « Il y a démonstration et démonstration », *Langue française*, No. 72, Paris, Larousse.
- PICABIA L. (1986b), « Remarques sur l'interprétation indéfinie », *Recherches linguistiques*, XI, « *Déterminants : syntaxe et sémantique* », Paris, Klincksieck.
- PINTO M. A. & EL EUCH S. (2015), *La conscience métalinguistique : théorie, développement et instruments de mesure*, Québec, Les Presses de l'Université Laval.
- POISSON-QUINTON S., MIMRAN R. & MAHEO-LE COADIC, (2002), *Grammaire expliquée du français*, Paris, CLE International.
- RIEGEL M. (1985), *L'adjectif attribut*, Paris, PUF.
- RIEGEL M., PELLAT J.-C., & RIOUL R. (1994), *Grammaire méthodique du français*, Paris, PUF.
- SCHMIDT R. W. (1990), « The Role of Consciousness in Second Language Learning », *Applied Linguistics* Vol. 11, Oxford, Oxford University Press.
- TOMASSONE R. (1996), *Pour enseigner la grammaire*, Paris, Delgrave.
- VAN DE VELDE D. (1995), *Le spectre nominal. Des noms de matières aux noms d'abs-*

- traction*, Louvain-Paris, Édition Peeters.
- VASSILIADOU H. (2014), « Les problèmes définitionnels de la distribution massif / comptable : où en est-on des oppositions courantes ? », *Langue française* No. 183, Paris, Armand Colin.
- WILMET M. (1983), « Les déterminants du nom en français : essai de synthèse », *Langue française* No. 57, Paris, Larousse.
- WILMET M. (1986), « La détermination des noms propres », *Recherches linguistiques*, XI, « *Déterminants : syntaxe et sémantique* », Paris, Klincksieck.
- WILMET M. (1987), « Le problème des noms abstraits », in DAVID. J. & KLEIBER G. (éd.), *Termes massifs et termes comptables*, Paris, Klincksieck.
- WILMET M. (1997), *Grammaire critique du français*, Paris, Hachette.
- ZRIBI-HERTZ A. (2006), « Pour une analyse unitaire de DE partitif », in CORBLIN F., FERRANDO S. & KUPFERMAN L. (éd.), *Indéfini et prédication*, Paris, PUPS.
- ROBERGE C. & RIETSCH P. (1975), 「現代フランス語法辞典」、大修館書店
- ROBERGE.C., GUILLEMIN F., (2002)、内藤 S.、加藤 M.、小林 M. & 中村 N. 「21 世紀フランス語表現辞典」、駿河台出版社
- 朝倉 S. (1967)、「フランス文法覚え書」、白水社
- 朝倉 S. (1981)、「フランス文法ノート」、白水社
- 朝倉 S. (1984)、「フランス文法メモ」、白水社
- 朝倉 S. (2002)、「新フランス文法事典」、白水社
- 一川 SH. (2003)、「新・冠詞抜きでフランス語はわからない」、駿河台出版社
- 大賀 M. (1979)、「現代フランス語名詞活用辞典」、大修館書店
- 小石 S. (1985)、「部分冠詞について」、『フランス語の諸問題』、三修社
- 小石 S. (1986)、「譲渡不可能なものを表わす名詞の前の限定詞」、『獨協大学外国語研究』、獨協大学外国語教育研究所
- 小石 S. (1997)、「N à N 型構文の限定詞について」、『フランス語を考える —— フランス語の諸問題Ⅱ』、三修社
- 小石 S. (2000)、「Déterminants et diathèse (限定詞と態)」、『フランス文化研究』、獨協大学フランス語科
- 目黒 S. (1966)、「新フランス公文典」、白水社